
パン屋さんの涙のお話

増淵高志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パン屋さんの涙のお話

【Nコード】

N8906M

【作者名】

増淵高志

【あらすじ】

むかしむかし、小さな町に住むパン屋さんのおはなしです。

（前書き）

「五月雨くさみだれ」と同時期に書いた童話です。
多少手直しをして掲載させていただきます。

ずっと、むかしのおはなしです。

とおいとおい国の、むかしのおはなしです。

さばくの小さなある町に、ひとりのパン屋さんがすんでいました。まいにち、朝早くからおきて、いっしょうけんめいパンを焼いてくらししていました。

町の人たちは、パン屋さんの焼くパンが大好きです。

「あの人のパンは、ほんとうにおいしいねえ」

「おいしいだけじゃない。このパンを食べると、なんだか元氣が出るんだよ」

「それはきっと、あの人が心をこめて、いっしょうけんめい作ったパンだからだよ」

町の人たちはそう言って、パン屋さんのパンを食べて、明るく元氣にくらししていました。

町一番の大工の親方は、いつもたくさんパンを買ってくれます。

「あんたの作ったパンを食べると、体の奥から力がわいて来るんだよ。おかげで仕事もはかどって大助かりさ。ありがとうよ」

「親方にそう言って食べてもらえると、私もがんばってパンを作る力がわいてくるんですよ。こちらこそありがとうございます」

親方はお金をはらうと、飛び切りの笑顔で仕事に出かけていきました。

町一番の意地悪だったおばさんは、パン屋さんのパンを食べるようになってから、だれにでもに親切な人になりました。

「ふしぎだねえ・・・あなたのパンを食べてから、なんだか心によゆうが出来て、人に親切にしようって気持ちになってきたんだよ。やっぱり、あなたのパンにはそういう力があるのかねえ？」

「それは奥さんが本当は心のやさしい人だったからですよ。私はただ、いっしょうけんめいにパンを作っているだけですから」

「なるほどねえ。いっしょうけんめい作ったパンだから、人の心を動かす力があるのかもしれないねえ」

町一番の親切なおばさんは、なんだか納得したというほほ笑みを浮かべてお金をはらい、おうちへ帰っていきました。

ある日、一人の男の子がパン屋さんにきました。

「ねえ、パン屋さんはどうしてそんなにいっしょうけんめいパンを作っているの？」

パン屋さんは、いいました。

「わたしはね、もともとこの町の人ではないんだ。もっと東の、まずしい村から来たんだよ。そこは、おいしいものが何一つないところだね。わたしは大好きな人たちに、美味しいパンを食べてもらいたくて、ここできゅぎょうをしているんだ」

男の子は、またきました。

「じゃあ、いつかはその村へ帰っちゃうの？」

パン屋さんは、笑っていいました。

「そうだよ。もっとおいしいパンを作れるようになったらね」

男の子は、そうなたらさみしいなあ、と言いながら帰っていきましました。

ある日、町に東から来た旅人がやってきました。

町でのひょうばんを聞いた旅人は、パンやさんの店にやってきて、たくさんのパンを買ってくれました。

ラクダの背中にパンをつみこむ旅人に、パン屋さんはききました。
「あなたは東から旅してきたのですね。わたしは東の小さな村の生まれなのですが、あそこがどうなっているか、知っていたらおしえてもらえませんか」

旅人は気の毒そうな顔で言いました。

「わたしはあなたの村のとなり町を通ってきたのですが、あの村はなんでも、ひどい疫病でみんな亡くなってしまったそうですよ」
パン屋さんは、驚きのあまり、なにも言えなくなってしまいました。

旅人は気の毒そうに、何度も何度もふりかえりながら、町を出て行ってしまいました。

その夜、パン屋さんは店のおくで、泣きました。

泣きながら、それでもパンを作っていました。

「わたしがここでパンを作っている間に、みんなは死んでしまった。わたしはそれも知らずに、ここで楽しくパンを作っていたんだ。もう、あの村に帰っても、私の好きな人たちは誰もいないんだ」

パン屋さんの目から流れるおおつぶの涙が、ひとつ、ふたつ、材料にまじり、パンの生地にねりこまれていきました。

パン屋さんは一晩中泣きつづけ、一晩中パンを作りつづけていました。

つぎの日も、たくさんの人たちがパンを買ってくれました。

よろこんで、パンを食べてくれました。

すると、どうでしょう。

「どうしてだろう？　なんだか悲しい気持ちになってきた」

「ああ…悲しくて、涙がとまらないよ」

「どうしてこんなに悲しいんだろう…」

パン屋さんの涙の入ったパンを食べた人たちは、みんな悲しい気持ちになって、泣き出してしまったのです。

みんな驚いて言いました。

「きつと、パン屋さんになにか悲しいことがあったにちがいない」

「あの人はいつも心をこめてパンを作っていたもの。きつとそうだ」

パン屋さんはその話を聞いて、もっと驚きました。

「わたしが涙の入ったパンを作ったからだ。わたしが悲しいパンを作ったせいで、町の人たちに悲しい思いをさせてしまったんだ。わたしのせいだ……」

その日からパン屋さんは店をとじて、すがたを見せなくなっていました。

つぎの日も、また次の日も、パン屋さんの店はひらきませんでした。

そしてとうとう、パン屋さんは町からいなくなってしまうたのです。

町の人たちは驚き、そして悲しんで、パン屋さんをさがしました。けれども、どれだけさがしてもパン屋さんは見つかりませんでした。

「もう、あの人のパンを食べられなくなってしまったねえ」

「あんなおいしいパンが食べられないなんて、さびしいことだ」

「なんとかしてあのパンを、わたしたちで作れないだろうか」

人びとはそう言って、自分たちでパンを作りはじめました。

ところが、どんなにがんばってもパン屋さんのようにおいしくは作れません。

「どうして私たちのパンは、おいしくないんだろう」

「きつと、パン屋さんのように心がこもっていないからだ」

「でも、私たちがおぼえている心のこもったパンの味は、今では

あの悲しいパンだけだよ」

「しかたがない。なんとかして、あのパンの味を作ってみよう。涙の味のパンを作ってみよう」

そうして、町の人たちはほんの少しだけ、パンに塩をいれました。涙の味のする塩を、ほんのすこしだけいれました。

そしてようやく、パン屋さんとおなじパンの味ができたのです。

「このパンを、これからも作って食べることにしよう」

「あのパン屋さんをわすれないように、この涙のパンを作って食べることにしよう」

町の人たちはそうきめて、涙のパンを作りつづけることにしました。

今でもパンを作るときに、ほんのすこし塩をいれるのは、こんなことがあったからなのです。

だから、あたたかくてやわらかいパンには、今でもほんの少しだけ、涙の味がまじっているのです。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8906m/>

パン屋さんの涙のお話

2011年10月6日22時55分発行